
さよなら、ベイバー

山内 詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら、ベイバー

【Nコード】

N7073V

【作者名】

山内 詠

【あらすじ】

極悪非道の荒川課長に今日も容赦なくダメだしを食らう岡崎美穂子の防衛術はメイクだった。どS俺様課長と頑張る女の子のお話。中編の予定。活動1周年記念リクエスト作品です。

武装

面倒くさいって、女同士で集まったりしたら、たまに言い合ったりする。

女って確かに面倒くさいよね。グラム単位で体重の増減気にして、お通じ悪ければすぐにお肌でちゃって、毎晩お風呂に入るたびに時間をかけて、それこそ爪の先から頭のとっぺんまで磨いて手入れして整えて。

だけど男の人から見ればそれが楽しそうに見えたりするみたい。

楽しいとか思っていないとやってられないよ。女って大変なの。ちょっと手を抜けばすぐに「女捨ててるんじゃない？」なんて言われちゃうし。

だから今日も私は気合を入れて準備をする。

洗顔したらローションパックして、はがしたらさらに化粧水をこれでもかかってくらい追加してパッティング。潤えー、潤えーって念じながら美容液つけて、日中用のUVカット成分入りの乳液でフタをする。これで第一段階終了。

ここからやっとメイク突入。

下地にコンシーラー、ファンデはお肌の調子によってリキッドとクリームとパウダー使い分け。今朝はちよつとファンデのノリがあんまり良くない気がするから伸びのいいリキッドチョイス。今日はシヤドウ何色にしようかな。いいや、無難にあんまり派手にならないブラウンゴールドにしよう。一重の私の目は何にも塗ってなければ本当に寂しい。自分の顔で一番嫌いなところ。

だから念入りにシヤドウを塗る。アイラインはジェルとリキッドの二段使いでぐりぐり粘膜を埋めたら目の周りをぐるっと囲んで。それでようやく普通位の大きさになるように思う。

仕上げにつけまつげをつけて、自前のまつげと一緒にビューラーで挟んでマスカラを塗る。ようやくこれでいつもの私の顔。仕上げに眉毛描いて、ハイライトとノーズシャドウにチークでおしまい。

お気に入りのジルスチュアートの手鏡の中にはこれでもかかってからの盛りメイクの女がいる。

ばっさばさのまつげ、気持ち悪いなんて言われていることは、知っている。派手なギャルみたいメイクだと言われていると、わかっている。

だけれど止められない。

これは私にとって武装なのだ。

だって、たつぷりメイクしていたら、泣こうと思ったって泣けないじゃない。

黒い涙流したくなんかないもの。泣いたらつけまつげだってとれちゃうし。

だから、私はメイクしなくちゃいけない。

泣きたくなくなるくらいしんどい毎日をやり過ごすために、私はメイクをする。

出かけたくないくらい気分が落ち込んでいる時こそ、メイクをする。せつかくメイクしたなら誰かに見せたい。ただ塗って落とすだけなんて悲しいから。

昨日はネイルも新しくした。仕事の邪魔になるから短めだけどピンクベージュのフレンチにラインストーン。綺麗な指はテンションを上げてくれるよね。コテで巻いた髪もばっちり、決まっている。

うん、大丈夫。今日も頑張れる。

「却下」

書類が机に大きな音を立てて投げ出される。2日ばかりで作った企画書、全否定。それでも勇気を振り絞って、直訴する。

「やり直しさせてください」

「いらん」

「……わかりました」

投げ出された書類を抱えて、頭を下げた。周囲から同情のような、憐みのような視線を感じる。

悲しいことに、これはいつものことだった。

せめて具体的にどこがいいとか悪いとか、言ってくれればいいのに。イエス・バットはビジネス会話じゃ重要じゃないのか。

なんて言えないのは極悪非道と評判の荒川課長相手だからだ。

荒川課長はむかつくぐらい仕事ができる。何しろ日本の最高学府出身で留学経験まである。さらに顔もよし、背も高い、出世頭、となれば女の子はほっとかないはずなのに、会社の女の子はみんな避けて通る。

既に綺麗どころが散々返り討ちにあっているというのもあるけれど、一番大きいのは優秀すぎるから。

課長は自分があっさりと出来ちゃう分、出来ない人に容赦が無い。そして出来ない人の気持ちもわかってくれない。

確かに仕事じゃ経過なんて結果の前じゃ全く意味が無いってことは当たり前だけれど。努力のどの字も認めてくれない相手じゃ、恋愛したいなんて思わないでしょ。

スパルタすぎる荒川課長のおかげで、ウチの課の業績は上がっている。……だけどその分課内のストレスもうなぎ登りだ。

一人目は黙って次の日から来なくなった。二人目は他の支店に転属願いを出していなくなった。多分三人目が、私だと、思われている。

荒川課長が上司になる前は、優秀ではないけれど普通くらいに仕事ができると思っていた。それがどうだろう。やることなすこと全てにダメだし。入社以来コツコツと積み重ねてきたつもりの経験や自信は、あつという間に粉々。

この企画書だつて、すつごく頑張つて作ったんだけどな。頑張りだけじゃどうにもならないつて、理解しているけどさ。

「おい岡崎」

席に着こうとした私の背中を極悪非道の声が追いかけてきた。

「お前もう企画とか作らなくていいから。茶入れてこい」

メイクがつつりしてきてよかったと思うのは、こんな時。

「……はい」

ぱんぱんに膨らんだメイクポーチを持って、給湯室へ向かう。メイク、直さなくちゃ、終業まで、頑張らなきゃ。

慣れ

悔しい。

さつき提出した企画書全否定ももちろん悔しい。

だけど何が一番悔しいかって、私を全否定されたのが、悔しい。

あの極悪非道は仕事に直接関わることで以外に言葉が全然足りない。

だからウチの課の人たちは省略された言葉の意味を察する能力を身につけてしまった。というか、身に付けざるを得なかった。

だから、わかる。

お前もう企画とか作らなくていいから。

あれはもう二度と企画書を作るなってことだ。

しかも私がさつき提出したものを訂正なりしてまた持っていくってわかっていて、言ってるんだ。

給湯室に駆けこんでポーチを漁る。二つ折りの携帯鏡、綿棒、ティッシュ、目薬、ウエット面付きの脂取りシート、ルースパウダーを流しの横力ウンターにぶちまけた。

「……………」

上を向いて嗚咽は呑み込む。目頭は綿棒とティッシュでガード。それで深呼吸すれば、涙はこぼれない。

極悪非道が直属の上司になって、2年。本当は慣れたくなんてないけれど、すっかり我慢することに慣れてしまった。

「はあ……………」

最後に大きく息を吐き出して、どうしようもないこの感情をやり過ぎす。

何度が瞬きをしてから、クール系の目薬を注す。そうしてやっと綿棒とティッシュのガードを外すことができる。

涙でぬれた瞼や目の端の色がティッシュに吸い込まれたら、見たまんまの色じゃなくて水溜りの油膜みたいな不思議な色になっているって知ってしまったのは、いつだったけ？

黒という色の成り立ちは全ての色を同じ分量だけ混ぜたものって昔何かで見聞きしたことがあったような。だから、涙に溶けたアイライナーやシャドウは、まるで七色みたいに見えるのかもれない。

手鏡の中には、ほんの少しだけ目を赤くした私がいる。よしよし、メイク直せば、OKだよな？

綿棒で滲んだところを修正してラインを引き直して、脂取り紙で鼻や目の下を抑えた後にルースパウダーをはたけば、ほら、元通り、朝の私^{あさ}がまたこっちを見ている。

我慢することに慣れてから、メイク直しのスピードも速くなったなとぼんやり思う。そんなスキルがアップしてもしようがないのに。ぶちまけたメイク道具をポーチに押し込んで、お茶を入れたら。

さあ、また戦場^{しんじょう}へと戻ろう。

「遅かったな」

「申し訳^{わけ}ございません」

湯呑みを机に置けばまた、極悪非道と向き合わなきゃいけない。

何かの仕事から外れるってことは、それとは別の仕事しろってことなんだよね。簡単に人の仕事を全否定するくせに、仕事していない状態をものすごく怒るんだ。理解するまで課内全員が怒鳴られたっ

け。

「今日中にやっておけ」

「……わかりました」

何も渡さずに期限だけ言うってことは、もう指示内容を社内メールで送ってあるということだ。本当に極悪非道は言葉が足りない。社内メールの内容を確認すれば、数値がずらずらと並んだだけの雑多な報告書をまとめた資料を作れというものだった。

今日中ってことは、恐らく週明けの会議で使うんだろう。ちらっと時計を見れば、11時になるところ。

半日じゃ到底間に合いそうもないから、残業は確定だった。

「じゃあお先します、お疲れさまでした」

「お疲れさまでした」

ひとり、またひとり、と同僚は帰っていく。金曜日の夜だ、なるべく早く帰りたいのが人情つてもんだよね。

極悪非道のおかげでうちの課は社内では残業多めの部類なんだけれど、本日に限っては、私ひとりだけが残業のようだった。別にいいけど、予定ないし。

今夜帰る途中でレンタルショップに寄ろう。笑えるDVDを見ながらスナック菓子とナッツたっぷりのチョコレートとコーラと一緒に食べてやる。油っぽいものを食べると胃もたれするし太るから、普段は食べないようにしている禁断のフルコースだけどやっちゃうんだ。

これが終わったら思いっきりいつもは控えていること全部しちゃう

んだ。

だから我慢、我慢。

これでお給料もらっているんだから、頑張らないと。

「ひつでえ顔ソウ」

なのに、思わず手を止めてしまつような言葉が横から投げつけられる。

……極悪非道のヤツ、まだ帰ってなかったのか。

「……すみません」

不細工はどうしようもないし、もう夜遅いんだからある程度の化粧崩れは仕方ないだろうが！

だけどヤツとは視線を合わせないまま一応謝る。
あんたにそんなこと言われる筋合いなんてない！ っって言えたらな。
言えるわけないけど。

「お前ホントムカつくな」

一応とはいえ謝ったのに、極悪非道は隣の席の椅子にわざわざ座るとキヤスターを転がして近づいてくる。

「人と話すときはちゃんと目を見ろって小学校で習わなかったのか？」

なんでこの人って空気読めないんだろ。周囲には散々それを要求しているというのに。

そっちを向かないのは自信満々で、人を見下すような目しているってわかっていいるからだ。誰だってそんなの見たくない。

頼むから、絡まないでよ。今日は、さらっとかわせる余裕、無い。

「こっち向け」

それでも唇を噛んで、視線を逸らし続けていたら、急に顎を掴まれて引き寄せられた。

すごく近く、まるでこれからキスをするみたいな距離に、極悪非道荒川課長の顔。

ちくしょう、やっぱりかっこいい。男のくせに鼻の頭にもその脇にも毛穴が見当たらないのが腹立たしい。こちとらコンシーラーにファンデでがっちり固めてやっと消せてるようなもんなのに！

今何か話したら、心の中の罵詈雑言が溢れそうな気がして、私はぐっと口を引きしめた。

不明

お互いの瞳にお互いの顔が鏡のように映っていると気付くくらいの間、課長は私から手を離さなかった。

私も抗おうとはしなかった。何かをしたら心の内の激情がありとあらゆるところから漏れてしまつかもしれないと思ったから。

だから傍から見れば、恋人同士が甘く語らっているように見えたかもしれない。

ふとそんなことが頭を過ってようやく、私は我に返った。

「放して、下さい」

そのたつた一言だけで最初の強引さとは全く逆、まるつきり興味を失ったかのように課長は私の言葉通り手を離れた。

ただどこちらをじっと見つめることは、止めなかった。

一体なんなんだ。

課長が何を考えているか全く見当もつかなくて、胸に渦巻いている怒りに苛立ちまでもプラスされる。

「おい、帰るぞ」

はあ？ 何言ってるの？

「……私は仕事終わってないですから、課長お先にどうぞ」

言うなり私は課長へ向いていた顔を身体ごと元に戻した。やりたくもない仕事にやりたくもない残業。さっさと終わらせて帰ったら、思いっきり好きなことするんだから！

終わってないのは課長がたんまり寄こした仕事なんだよ！ って言

つてやれたら、本当にどれだけ心が晴れるだろう。

そのまま課長の方は見ずに仕事を再開する。

元データを整理して並べ替え、見やすくなるように一部はグラフ化する。量は多いけれどすごく単純な誰にでもできる仕事。それが似合いの、私。それくらいしかできないのが、私。そう示したのは、横にいる極悪非道だ。

「これ以降の残業は認めねえからさっさと終了しろ」

「……今日中とおっしゃったのは課長でしたが」

「はあ？」

極悪非道は同じことを二度言うことを嫌がる。朝令暮改はろくでもない上司のやることだって知らないのか。

自分でも己が部下に好かれていないってことはわかっているのだろうか。極悪非道だったらわかっていない気がする。何しろこちらの気持ちなど、全然考慮してくれないのだから。

仕方なく出来たところまで保存して、パソコンの電源を切る。ため息はこらえられなかったけれど。

課長の方は全く見ずに帰る支度を整え、私物入れにしている引き出しから鞆を引っ掴んで「お疲れさまでした」と去ろうとしたら。

「よし」

「ちょっと、なんですか!？」

課長は私の腕を掴んでぐいぐいと歩き始めた。大柄な男性の歩幅にはついていけなくて、足が絡まり、しまいには小走りになる。

そのままの勢いでエレベーターに乗せられて、それでも腕は解放さ

れない。

「あの、放してください」

「うるせえ。黙って言うこと聞いとけ」

一体何だっというんだ。極悪非道の考えていることはいつもわからないけれど、今はそれに輪をかけてわからない。そりゃ企画書の出来は悪かったかもしれない。だけど代わりに与えた仕事を中途半端にさせてどうするつもりなんだろう。

以前残業を控えるように通達があった時、虚偽の退勤をした後サービス残業をしていた人がいて問題になったことがあった。その人は上司から押し付けられて自分の能力以上の仕事を抱えていたから周囲は同情的だったけれど、労働基準監督署からの監査だかが入って、総務にいる同期がかなりやかいなことになったとぼやいていたのは覚えている。それから残業の申請が確かに面倒になったもの。私と同じことをしそうだとしても、思ったのかな。……切羽詰まったらやるかもしれないけど。

「あの、別に仕事途中だったからって、戻ったりはしませんから」

極悪非道は「お前何言ってるの？」とばかりに目線だけをこちらに向けた。どうやら違ったらしい。

何か気に障る事でもしただろうか。一応極悪非道とはいえど理由も無く怒鳴ったりはしないってことは、わかっている。だから何かあるはず。でも今日は企画書全否定された後指示通りずっと資料作成していたから、付け入る隙は無かったと思うけどな。

エレベーターが1階に着いても課長は私の腕を放してくれなかった。扉が開くと同時に靴音をわざと立てているのかってくらい響かせて

エントランスを縦断していく。私はばたばたと無様な格好で引きづられるように付いていくことしかできない。そのまま玄関を出て、ずんずんと大きい通りに向かって歩いていく。すれ違う人がちらちらとこちらを見ているのがわかる。どう見たっておかしいよね。

「あの、課長」

いい加減にしてくれ、と言おうとしたその時、突然目の前にタクシーが止まった。乗れとばかりに後部座席のドアが開く。

「行くぞ」

「えっちょっと行くって、どこに!？」

「俺の家」

「はあ!？」

そんなアホみたいなやりとりしているうちに、私はタクシーに押し込められていた。降りたくても乗降側にはしっかり課長が陣取っている。

さすがに一体どういうつもりかを問い詰めようと息を吸いこんだら、吐き出すタイミングで運転手さんの「どちらまでですかあ?」なんてちょっとお前空気読めよって言いたくなるくらいほんわかした問いかけに遮られてしまった。

「とりあえず上城東のローソンまで。近くなったらまた言います」

「かしこまりました」

無情にもドアは閉まり、タクシーは走り出してしまった。

不明（後書き）

次あたりから、デレます（多分）

訪問

ウインカーをつけてタクシーが車の列の中へ滑り込んでから、ようやく極悪非道は私の腕から手を離れた。何気に掴まれていたところがちよつと痛いんですけど。思わず反対側の手でそこをこする。

でもなんで課長の自宅になんか行かなきゃいけないんだ。家に連れ込んで説教？ 冗談じゃない！

本当に何考えてるんだろう。さっぱりわからない。

なんだかなあ。

思わずため息が出た。

理解不能の極悪非道にいいように振り回されて、何やっているんだろう私。

ヤツは私をどうしたいんだろう。

さつき膨らんだ反撃の勢いは膨らんだときと同じくらい急に萎れて、なんだかもうどうでもよくなってしまった。とりあえず乗ってしまったのだから、もうどうにもならないし。

私も課長も喋らないから、車内には運転手さんのギアを変える音とタイヤがアスファルトの上を転がる音くらいしか響かない。

ちらつと横を窺うと、ドアに頬杖をつけてガラスの向こうを眺めている。通り過ぎる車のライトや街灯に照らされた極悪非道の顔は、はい、相変わらずイケメンです。

ある意味こんな残念な美形もいないよね。口を開けば罵詈雑言しか出てこないなんて、遠くから見ているだけならいいかもしれないけれど、近くになんて絶対いて欲しくない。

確か上城東なら会社から車で20分くらいのはずだ。あの辺りは家賃結構高かったと思うけど、課長様は稼いでらっしゃいますものね

！。

なんか変なの。そういえば、課長とこうして二人きりになったのは初めてかもしれない。

黙っていても、別に気詰まりではない。

これはお互い話す意思が無いってこと隠してないからなんだろうな。そんな微妙な沈黙を破ったのはやっぱり空気の読めない運転手さんのほんわかした声だった。

「お客さん、ローソン見えましたけど」

「ローソンの脇の道入ってもらえますか、ああ、そこでいいです」

もう着いたのか。あつという間だったような、長かったような、不思議な時間だった。

ドアが開いて、不思議な密閉時間が終わる。

早く降りたいけど乗降側に乗っている課長が会計してくれないと降りられない。もちろん私は1円も払う気持ちはありません。

上城東からだとう帰ればいいんだっけ？ 確か最寄駅は私鉄だったように思うけど、携帯で検索すればいいか。まだそこまで遅い時間じゃないし。

なんて考えていたら課長が会計をやっと済ませてくれた。遅いよ。

やっと課長が降りてくれたから、私も降りるべくシートに手をついてお尻をずらして身体ごと乗降側のドアに近づいたら。

「行くぞ」

「きゃっ！」

不意にシートについていた手をさらわれて引っ張り出される。

ちょうど体重を手にかけていたから思いっきり前傾姿勢でつんのめるように車から降ろされてしまった。

「ちょっと何するんですか！」

危うくアスファルトの上で転ぶところだよ！

でも、怒りをこめて睨んだって極悪非道には通じないわけで。

「行くぞ」

「あの、ちょっと」

また強引に掴まれたまま歩きだす。……だけどさっきと違うのは掴まれているところが腕じゃなくて、手のひら、つまり、手を繋いでいるって、こと。そして、さっきよりもずいぶんゆっくりと歩いてくれているってこと。

「課長、私」

家になんて、行けません。そう続けようと思ったのに、遮るように課長が喋った。声はいつもの傍若無人さはどこへ行ったのかわたらくらい穏やかだ。

「飯、食わせてやる」

何なの、一体どうなってんの？

いつもとは違う声に、私は何故か抵抗できずに大人しくついていくことしかできなかった。

課長の家は3階建てのマンションの2階だった。

帰ろう。この手を振り切つて帰ればいいじゃない。さっきみたいにがっちり腕をつかまれているわけじゃないんだから。

だけど頭ではそう思うのに、どうしてか身体はちつとも動かなくて階段を上り課長がポケットからキーケースを取り出して鍵を開ける様子までぼんやりと眺めてしまふ。

そして促されるままに室内へと入ってしまった。

「座って待つてろ、すぐできる」

言うなり課長はソファに上着と鞆を投げ捨てるように置くと対面式のキッチンへと向かう。

座れと言われたけれど、座る場所とおぼしきソファには上着と鞆がある。どけていいもんなのかな。ちよつとずらして、端っこに腰かける。黒い皮製っぽい見た目よりもふわふわした座り心地だ。

ソファの前にはこれも黒い木のローテーブルとでっかいテレビ。

ベッドが見当たらないし、壁紙と同じ色の引き戸があるから、隣が寝室かな。そのままぐるつと室内を見渡してみる。なんかすごく片付いてる部屋だ。物が極端に少ないし、黒い家具って結構ほこりが目立つのに全然ない。

テーブルの上にあるのは昨日の日経新聞とテレビのリモコンだけでテレビの乗っかっていている台にちよこんと小さな多肉植物の鉢植えが飾られているくらい。

「おい、座るのそつちじゃなくて、こつち」

呼ばれてキッチンの方を向いたら椅子が向い合せにふたつついた小さなダイニングテーブルがあった。

「あ、はい」

慌ててそちらに座ると、キッチンのカウンターからよきつと手が伸びてきて、どん、と勢いよくお皿が目の前に置かれた。

「まず、それ食ってる。他のもすぐできるから」

……どうやら本当に、ご飯をご馳走してくれるみたいだ。

訪問（後書き）

あれ？ なかなか辿りつかない…。

1) 飯

目の前のお皿に盛られていたのは綺麗に並べられた白身魚の切り身の上に紫色のカイワレ大根と青ネギ、粒コシヨウが散らされたものだった。鯛か何かのカルパッチョかな。

言われた通りにテーブルに置いてあった箸を持ってはみたものの手をつける気になれず、それを眺めていたらまたキッチンの方から手が伸びてきた。今度置かれたのは小鉢がふたつ。青紫蘇やらみょうがやら、薬味がたっぷり盛られた冷ややっこ。

「何かける？」

「へっ？」

「豆腐。醤油でいいか？ 普段何で食べてるんだ」

「えっと、ぼん酢、です」

「わかった」

すぐに黄色いフタの瓶が差し出されて、慌てて受け取る。右手にお箸、左手にぼん酢を持った私には、全く今の事態が理解できていなかった。

本当にすぐ料理が出てきた。課長がキッチンへ行ってから10分と経っていないはずなのに2品も。確かにどちらも火を使わず調理方法が比較的簡単なものではあるけれど、同じことをしるって言われなくても私にはできない。なんでも出来ちゃうご立派な課長様は料理までも手際よくやらかしてしまうのか。

茫然としていると、またによきつとカウンターから腕が伸びてくる。今度は湯気のたった木製のお椀。ごろごろと大きく切られた人参やら大根やら牛蒡やらが味噌汁の中から飛び出している。切ったばかりのみずみずしいネギと一味がきちんと乗せられていた。火の通った味噌とネギのいい匂い。

次々と料理が出てきて、あんまり大きくないダイニングテーブルの上はいつの間にかお皿で一杯になっていた。

カルパッチョに冷ややっこ、野菜たっぷりのお味噌汁、トマトのマリネっぽいものがかけられた焼いた豚肉、そして石焼きじゃないピビンパ。

統一感は何もなくて、共通するのはどれもすごく美味しそうってこと。

「なんだ、食ってないのか。いいから食え」

作り終えたの課長が向かい側に座ってからも私はどれにも箸をつけることが出来なかった。こんなにたくさんの料理が目の前にあるのが久しぶりすぎて、食べる前からお腹がいっぱいだ。

そういえば最近何を食べていたっけ。お昼はコンビニか、会社近くのお惣菜屋さんのお弁当で、朝や夜は時間も食欲も無いからと食べなかつたり適当にあるもので済ませたりしていたような。

いただきます、と柏手を打つように勢いよく手を合わせて、食べ始めた課長のお箸のひとすくいが大きい。一旦小皿にちよつと置くような仕草をするのだけれど、ほとんどそのまま口の中に収められていく。

男性の食事ってこんなに豪快だったっけ。思わず眺めてしまっていた私を見て、課長が微笑んだ。

ちよつと！ 失笑でも冷笑でもない笑顔、初めて見たんですけど！

「何呆けてんだ」

笑いながら私の手からぼん酢を取って、冷ややつこにかけてくれた。そのまま自分の分にもかけて、一口頬張る。

「へえ、ぼん酢もうまいな。俺はいつも醤油とごま油なんだけど」

これにラー油合うつんじゃないか、なんて呟くとそのまま席を立て冷蔵庫から瓶を取り出してきた。た、食べるラー油常備しているんですか？

「うん、うまい！ ほら、食べてみるって」

食べるラー油がかけられた冷ややつこが私の前に押し出されて、促されるままに箸をつける。

冷たいお豆腐にたっぷり盛られた薬味とぼん酢の酸っぱさに食べるラー油の香ばしい辛さがすごくマッチしている。

「……おいしい」

「だろ」

得意げな笑顔がま、眩しすぎる。そうだよ、この人イケメンだったよ！

課長の顔から目を逸らして、出来たての料理に目をやる。

一口食べてしまったら、さっきまで影も形もなかった食欲がわいてきた。

今日はお昼ご飯だってまともに食べてない。空腹だったことを思い出したらあとはもう躊躇がなかった。

カルパッチョは思った通り鯛で、淡白な身にはオリーブオイルとガ

ーリックの風味が利いているし、お味噌汁はほっこり煮えた野菜がたっぷり。かりかりに焼かれた豚肉はベーコンに似た旨みと塩気が甘めのトマトと相性抜群。ビビンパに乗っているナムルはちゃんと種類ごとに違う味付けだ。

美味しいものを食べることが嫌いな人なんていないだろう。だから私は知らず知らずのうちに食事に集中してしまっていた。

でも一通り好きなだけ食べてふと気付くと、課長が微笑みながらこちらを見ている。

あれ、私極悪非道と普通にご飯食べてるよ。しかも手料理を！

その不可解さに改めて気づいてしまったとたん、箸が止まってしまった。

「ん、もうお腹いっぱいになったか？」

優しい声色に、びくり、と身体がすくんだ。だって課長のこんな声、聞いたこと無いんだもの。

怖い。いや声は全然怖くないんだ。何だろう、恐ろしいというのが近い気がする。

得体が知れないものが目の前に、いる。

「もっと食べる。お前、最近全然食べてないだろう」

課長の腕が伸びてきて、私の左手を掴んで持ち上げた。腕時計が手首からするするっと肘の方へ落ちていく。こんなに時計のバンドのサイズ、緩くしていたっけ？

「こんなに痩せちゃまって」

ここ最近体重計にのっていなかったから、痩せたかどうかなんて全然気づいてなかった。だけれどこうして見れば、明らかだ。一目瞭

然とは、こういうことを言うんだらう。

私が見えて瘦せたから、ご飯をご馳走してくれたのだからか。

普通の上司だったら、珍しい話じゃないかもしれないけれど、私の向かいにいるのは極悪非道の荒川課長で、しかも自宅で手料理。

どう考えたって、有り得ないでしょ！

命令

課長に掴まれた左手を振り払うと課長は少し驚いた顔をした。右手に持っていた箸をテーブルに勢いよく置いたらばちんと派手な音がしてしまった。テーブルに傷ついたかな、とかちょっと思ったけど今はそんなことに構ってられない。深呼吸をして一気に言い放つ。

「もつ目的は何ですか?!」

普段の極悪非道ながら優しく手料理をご馳走してくれるなんて天地がひっくりかえってもあり得ないんだから、何か裏があるはずだよ。よっぽどの理由が。

私に優しくして極悪非道が得する、ことってなんだろう。仕事はいつだって全力でやってる。これ以上何をしろって? ……まさか、というか、ひとつしか浮かばない。

「目的?」

「はいっ!」

「……何だと思っ?」

「しつ質問に質問で返さないでください!」

優しく微笑みながら言われても、そんなんじゃ誤魔化されませんか。らっ。

まっすぐに私を見つめてくる課長の眼力に負けないように、私にもらみつけるくらいの勢いで課長を見返した。

「さすがにこんな鈍いとは思って無かったわ」

課長は頬杖をついていつもの意地の悪い笑いを片頬に浮かべると、面白そうに言った。その表情に少しだけホツとする。私の知っている極悪非道に戻った気がしたから。

さっきまでの課長は、優しさって仮面を被った得体の知れないモノって感じだったんだもん。

「……答えになってませんが」

「お前さ、仕事辞めるよ」

「っ?！」

や、やっぱりそれしかないよね。

わかっていた。本当は。

最近はずっと企画に関わるどころか、その前段階に触る程度がせいぜいな仕事しか任せてもらえていなかった。指示された資料を探して、收拾したデータをまとめて。誰にでもできる、簡単な仕事。だから本当は今日提出した企画書に賭けていたんだ。

ほんの僅かでも少しでも 目の前の人に認めてほしくて。

だけど今、お前は、役立たずだっという最後通牒を突きつけられた。わかってる。

仕事においてどんなに努力したとか、苦労したとか、そんなことは

何の役にも立たない。大切なのは過程ではなく結果なのだ。

計算問題のように答えがひとつしかなくて、解きかたを学べばその答えに辿り着くようなものではない。努力が実を結ぶとは限らない。

目頭に、熱を感じる。

堪えるようにぎゅっと目を閉じると、喉の奥からも熱がせりあがってくる。涙を我慢したせいで、熱が行き場を失ってしまったからだろうか。

やばい、ここで泣いてどうするんだ。極悪非道の前じゃ、絶対泣かないって決めていたのに。

テーブルの上で手のひらをぎゅっと握りしめて、わざと一旦呼吸を止める。そして溢れだしそうになる嗚咽を必死で呑み込んだ。呼吸をしようとして口を開けたら、漏れ出してしまいそう。

我慢しろ、私。

泣くのを我慢することになんて、もう慣れっこなんだから。

ばちばちと音が聞こえるくらいわざとらしく何度か瞬きを繰り返す。うん、涙は引込んだ。少しずつ鼻から息を吸い込んで、口から吐き出しても声は漏れない。うん、大丈夫、喉も震えていない。

みっともなく泣き崩れるなんて、この極悪非道の前でしてやるもんか。

笑ってやる。

なんとも無いことだって、思わせてやる。それが私の下らないかもしれないけど、プライドってやつだ。

「わっかかりましたあ」

口角を上げて言い放った声は馬鹿みたいに明るいものだった。

「じゃあとりあえず月曜今日指示された資料作り頑張りますね！
そのあとは引き継ぎに入らせてもらいますっ」

大丈夫、大丈夫、と頭の中で繰り返しながら、ぺらぺらしゃべり続ける。

「有給と、あと代休も残っているんで、退職は2カ月後ってところでしようかあ」

いつかこんな日が来るかもしれないって思っていたから、大丈夫。周囲の人はきつと、今までよく頑張ったねって褒めて同情してくれるだろう。だから大丈夫。仕方ないんだ、私の能力が足りなかっただけなんだから。

「お前、本当にわかってねえな」

私の馬鹿みたいにわざとらしく明るい声をいつもの極悪非道の冷たい声が遮った。

途端に、びくりと身体が竦んだ。

慣れたと思っけていても、大丈夫だと言い聞かせていても、ダメなんだ。

極悪非道の怖さに逆らえない。

本当は頼むからこれ以上傷つけないで！ って叫びたかった。

役立たずだって言われただけでも社会人としては再起不能になりそうレベルなんだから！

ところが極悪非道の次の一言は、全く予想もなかったものだった。

「……全く、男が女に飯を食わせるなんて、目的はひとつだろうが」

男が女に、「ご飯を食べさせる?!

言われてみれば確かによくある構図ではある。家に招待して手料理を振舞う。逆ならさらによくあると思うけど。

極悪非道課長が使えない部下にはなくて、男が女にご馳走する、その理由って。

一瞬のうちに今まで考えもつかなかった理由に思い至る。だってそれって、あり得ないどころの話じゃない!!

「さっさと仕事辞めちまえ」

すると課長の手が伸びてきたから反射的にその手から逃れようと身を引いたけど、間に合わずに顎を捉えられる。顔を背けようとすることも出来ない。

驚愕に目を見開いている私とは反対に、課長は蕩けるような微笑みを浮かべながら命令した。

「そんで俺のところに永久就職しろ」

命令（後書き）

やっとデレた？

いやこれにはデレたと言えるのか……？！

全部

えいきゆう就職って、まさか等級とかのA級ってわけじゃないよね。そのままの意味で受け取るなら。永久就職。つまり。

極悪非道と、結婚、しろってこと？

「そう、俺と結婚しろって言ってんだよ」

私の頭の中が見えているのかってくらいタイミングで、極悪非道がダメ押しみたいに言ってる。もちろん、とびっきりの、笑顔で。

ぐるんぐるん頭の中で結婚っていう二文字が躍る。結婚って、どうして？

極悪非道課長と私が結婚する理由ってあるの？

なんだなんだ一体どうしてだ？

「ぎ、偽装結婚でもする必要あるんですか？」

……混乱する頭で真剣に考えて考えて思い至った理由は、極悪非道の大爆笑にかき消された。

な、何も本気でお腹抱えなくなってるいいじゃないか。ひーひーわざとらしく言わなくなっていいじゃないかっ。

「お前のそういって、嫌いじゃないぜ」

ようやく笑いが治まった頃、極悪非道はいつものにんまりとした嘲笑を浮かべながら言うてくれやがった。むかつく。だけど、こっち

の方が安心するのはなんでだろう。

自分の顔が整っていることを十二分に自覚していて、その笑顔にどれほどの威力があるの熟知している、そういう笑いは得体が知れなくて、怖い。

だけど極悪非道な顔は見慣れている、だからなんとも無いんだ。

「き、嫌いじゃないってことは、好きでもないってことじゃないんですか」

好きの反対は嫌いじゃないって、好きの反対は無関心。つまりは好きでも嫌いでもないって状態のことだ。好きじゃなくせに、なんで結婚なんて話にならなきゃいけないの。

ところがあまり考えもせずに発した言葉だったのに、それがきつかけになったようにずるりと今日の嫌な記憶まで引つ張り出されてきた。

お前もう企画とか作らなくていいから。

この世で一番の不幸は、誰からも必要とされないことだって言ったのは、誰だっただろう。少なくともあの時、私は、目の前の極悪非道から必要とされなかった。

それなのに好きだとか嫌いだとか結婚だとか、わけがわからない。そもそも私と極悪非道課長はそういう間柄じゃないわ！ 馬鹿にすんな！

ぶわっと溢れだすように怒りが湧いてくる。だけど一緒に涙も出てきてしまう。泣くな、泣くな私、さっき我慢できたじゃないか、今まで我慢してきたじゃないか。

こんなところで、こんなことで、全部台無しにするんじゃないっ！

「だっでがじょうばわだじなんでもつびづようないんでじょうがあ

「ああ」

我慢したつもりだったのに、堤防が決壊するみたいな勢いで涙は重力に負けた。ぼたぼたと流れ落ちる涙だけならともかく、喉から漏れる嗚咽に引きずられるように胸と肩まで大きく動く。

私のことが気に食わないなら、いつもみたいに遠慮なんて無しでそう言えばいいんだ。冗談にしてはたちが悪すぎることをわざわざ言ったりしないで！

手の甲で乱暴に涙をぬぐえば黒いラインがべったりと付いた。泣かないように、負けないように。そんな気持ちをたっぷり込めて施したメイクは、もうぐじゃぐじゃだろう。

でも別にもういいや。投げやりかもしれないけれど、だって会社辞めるんだし、もうどうだっていい。ゆるく拳を握ってぐじぐじともう遠慮無しに涙を拭いた。

「……俺がいつお前のこと必要無いつていった」

この期に及んで追及かよっ。

「ぎょういつだじゃないですがあ」

「ああ、そういうことね」

「がっでになつどくじないでくださいっ」

なんでもわかってるって、余裕綽々なその顔が最高に気に入らない！

「んじゃ言い換えるわ。お前は、企画には向いてない」

課長の顔から意地の悪い笑みが消える。そのかわりに仕事をしてい

る時の真剣な眼差しが私を射抜く。

「目の前に広げられた材料をチョイスは出来るくせに、組み立てる能力が皆無。」

資料は完璧なのにプレゼンはど下手。

文章だのから意味を汲み取るのは上手いのに、会話からは壊滅的
言われたことは確かにその通りだった。

元々私は自分に自信が無い。だから準備出来ることは完璧と言えるくらいにしておかないと気が済まない。でも内容にどんなに自信があってもずらりと目の前に判定を下す人間を並べられたら口はちつともうまく動いてくれなくなる。人見知りだから、初対面の人と簡単にコミュニケーションなんて取れなくて、いつもぐだくだくなる。なんだって要領よく出来ないから、必死で努力することで他人との差を必死で埋めているだけ。
ドロドロに溶けて手の甲についたメイク。中身を変えられないなら、外見くらいは隙の無い人間でいたかった。だから毎朝必死で武装してた。

「つまりだ。お前はゼロから何かを生み出す仕事には向いてねえっ
てこと。」

アレンジもダメ」

それは確かに、プランナーとしては致命的な欠点だ。

「でもなあ、人より優れてる部分だってある」

「ふえ？」

今優れてるって、言ったの？ 課長の口から仕事に関しての賛辞の

言葉、初めて聞いた。

「ひとつのコンセプトに沿って、キーワードを集めて、展開する。必要だと思われる資料の要点を纏める。そういう作業はお前に任せときゃ間違いない」

どうだとばかりに課長はにやりと口の端を上げて見せた。

それは近頃やたらやらされていた仕事だった。メインの進行ではなくて、その前段階の作業。

……でも、それは私じゃなくて、他の誰でもできる仕事だ。

これじゃまるで一度褒めてから落とされたようなもんじゃん。そう思うとまた新たな涙が湧いて出てきた。

そんな私の心の中は、口に出さずとも課長には丸わかりだっただろう。

「誰でも出来る仕事なんて、嫌か」

答えられなかった。誰かに認められたい、優秀だと言われたい。こんな仕事じゃなくてもっと褒められるような、目立つような仕事が見たい。出来ない癖に、そんな風に思ったことが無いなんて、言えなかったから。

課長は面倒くさそうに大きくため息をつく。と席を立つと、ソファの前のローテーブルの下からティッシュのボックスを取り出して、まだ嗚咽の止まらない私へ差し出してくれた。

ありがたく受け取って思いつきり鼻をかんだ。もう課長の前で取り繕う気持ちは完全に無くなってる。

「仕事において代りのきかねえ人間なんてねえんだよ。

お前も、もちろん俺だって、そうだ。

いなくなつたとしても誰かが穴埋めをしてくれる。何も返しちゃくれねえ。

そんなもんに縋るな。依存すんな」

「……じゃあどうしろって言つんですか」

自立して生活していくために、仕事は必要だ。仕事って労働の対価としてお金を受け取るだけじゃない。その仕事をしているという、自負、愛着。そういうものを求めるって部分だつてあるじゃないか。それをただの依存だつて言うの？

「だから言ってるじゃねえか」

課長が手を伸ばしてくる。指の背で頬を撫でられた。そのまま、抱き締められる。ティッシュのボックスが、ぼこん、と大きな音を立てて床に転がった。

耳元に課長の熱い息を感じて、極悪非道でも課長でもなく、私を抱き締めている男の人を強く、意識してしまふ。

「俺のもんになれよ。俺の全部をやるから……お前の全部も、くれ」

阻止

「……なんで、私なんですか」

情熱の込められた言葉を簡単に受け取ることはできなかった。だって私は今まで課長から個人的な好意を匂わされたことすらないのだ。ただの上司と部下。それ以上でもそれ以下でもない関係だったんだから。

「何？　こんだけ言ってもわからねえってそんな馬鹿だったかお前」
馬鹿と言われて頭に血が上るのがわかった。いつもなら極悪非道の罵詈雑言なんて聞き流せるけど、今私の武装はぼろぼろになっちゃったから、我慢なんて出来ない。
だからイラついた気持ちそのままに言い返してやる。

「わかるかつ！！　馬鹿はそつちだ！」

あんなに厳しくされて好きになんかなるわけないし、そもそも結婚とか全部とかいい出す前に言ったり態度に示したりしなきゃならんことがあるだろうがつ。

睨んでやりたいけれど極悪非道は顎を私の肩に乗せているもんだから顔が見れない。ほんつと腹立つ！

「俺、公私混同しない主義なもんでね。

例えば部下を気に入ったとしても、逆に部下だからこそ手なんか出せるか」

なんだそれ。でもそれならなんで今こうして家に連れ込んでんの？

私はまだ会社辞めてないから、極悪非道の部下じゃないか。顔を見てないのに、極悪非道はまた私の頭の中を見透かしたように言った。

「転職決まったからな。もうすぐ部下と上司じゃなくなる」

「へっ!？」

驚きのあまり極悪非道の肩を押したら、あっさりと離れた。

転職って、どういうこと？

部下からしたら極悪非道でも会社からしたら課長は金の卵どころの話じゃない。ウチの会社の文句無しで稼ぎ頭。もしも極悪非道がいなくなったらウチの部署が今抱えている仕事の半分以上は、多分離れていくだろう。だって極悪非道が関わることを前提とした仕事ばかりなのだから。

そんな状態で自分がいなくなったりしたら、会社がどうなるかなんてお見通しのはずだ、そういう人だもの。潰れはしないだろうが、右肩上がりが一転右肩下がりになることは間違いない。

不敵な笑みを浮かべた極悪非道はなんでもないことのように言うけれど、辞める辞めないでこれからひと悶着あるはずだ。同じ部署の私は確実にそれに巻き込まれる。勘弁してよ!!

「給料も今より上がるし、何も心配すること無いぞ。安心して仕事辞めて嫁に來い」

仕事を辞めて、を妙に強調しながら、また極悪非道はにこやかにプロポーズまがいのことを言い放つ。

もしかして仕事を辞めろって、これから大混乱が待っているから？

聞いてしまつたら確かに仕事に対する未練が吹き飛ぶくらい会社に行きたくなくなりましたよ。

多分仕事に関することにはもう目処を付けてあるんだろう。会社に残る足で砂をかけていくような行為はしない筈だ。公私混同しないといつても義理は通すし仁義は守るんだよね。だから余計やつかいなんだけど。

極悪非道の行動にはいちいち理由がある。なんとなく、なんて曖昧なことではコイツは絶対に動かない。

きつと今夜私を家まで連れてきたのは、全ての準備が整つたから。

「嫌です！」

やり口が予想できるからこそ、それに乗ってなんかやるもんかと思う。

もしも何にもない状態で、ただ出会って告白されたんなら断るにはもつたいたいような誰が見たっていい男。

ところがそんな見かけや条件なんて吹き飛ばすくらい碌でもない、それが極悪非道荒川という男。

私はそれをそりゃもうお腹一杯知っているじゃないか。

だけどそんな私の精いっぱい反撃を極悪非道は勝ち誇つたような笑顔であつさり蹴散らしてくる。

「知ってる」

「じゃあ諦めてくださいっ！」

「断る」

「私が課長と結婚するなんて絶つ対ありえませんか！」

「するよ。俺が本気になったらどうなるか、お前知ってるだろ」

知ってる。無理目のプレゼンひっくり返して大きな契約取ってきたのだから一度や二度じゃない。

だけど負けるもんか。どうしたって負けたくない。私の心は私のもので、極悪非道におもちやのように面白がられるものじゃないし自由にはされたくない。

むかつくくらい整った極悪非道の顔をにらみ返してふざけるなど怒鳴ろうとしたら、不意に手が伸びてきて、とれかけたつけまつげを指先でつつくように弄られた。

「なあ、その仮面みたいなメイク落として、素顔見せろよ。」

……こんなに知りたいと思った女はお前だけなんだ」

知らぬ間に離れたはずの極悪非道との間合いが近くなっている。

眩しいくらい笑顔から一転、切なそうに寄せられた眉に、私の胸がどくと反応してしまった。一瞬の隙をついてまた、抱き締められる。しまった！！

「俺になんだかんだ言われるたびに、こっそり塗りこんできやがって」

私の化粧がどんな意味を持っていたかつて、知っていたの？

呆然としていたら、課長の手が優しく髪を背中を撫でて、さっきとは違う意味で胸が痛んだ。

知ってたんなら、どうして。結婚したいくらい好きだってんなら、どうして。ざくざく刃物で切りつけるような言葉と態度だったんだよ。

じわりとまた目の奥が熱くなった。やばい、こんなところで泣いたら変な誤解されそうじゃないか？

「なあ、これからじっくりお前のこと口説いてやる。
それこそもう嫌ってくらい甘やかして可愛がってやるよ。
もうそんな化粧なんてしなくていいくらいにな」

課長のきれいな顔が、私に近づいてくる。逃げられない！

「ひゃあっ…！」

思わずぎゅっと目を閉じて身を竦ませると、べろん、と頬を舐められた。びっくりして目を開ければ、にやにやと笑う課長の顔が、目の前で。

「邪魔なもんは全部とっばらうちまおうな。……返事はそのあとでもいいぜ？」

喉の奥でくつくつと笑いながら、課長はトドメを刺すみたいに耳元に熱い息を吹きかけながら囁く。

「まあイエス以外は受け付けねえけど」

この武装を全部取り払われたら、きっともう抵抗できない。そんな気がするから、なんとかして今ここで極悪非道の猛攻を阻止しなきゃいけない。

とりあえず、この腕の中から私はどうにかして抜け出さなくちゃ！

………だけどうしてか身体に力が入らないんだ。

ま、負けるな、私！

阻止（後書き）

結局最後まで「好き」とは言わない不器用な俺様課長はいかがでしたでしょうか。

二人の攻防、どちらに軍配があがるのかはご想像にお任せします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7073v/>

さよなら、ベイバー

2011年11月10日09時55分発行